

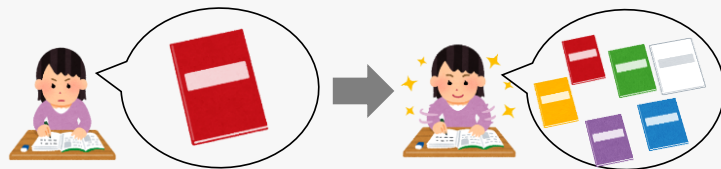
「歴史はただ一つの物語か」

私は、これまで文学部に在籍し歴史学を専攻してきました。そこにおける4年間で、自ら導き出した論を語り、「一般的な歴史事実」とされる歴史の説を批判する歴史学者としての姿勢を肌で感じてきました。卒業論文は、その姿勢を少しでも体現したものであってほしいと願っています。

歴史学における学びを経た後、中学校・高等学校で受けてきた社会科教育、とりわけ歴史教育を検討すると、そこで実施される授業には問題とがあると考えられます。そこでは、歴史には、あたかも単一の普遍的・絶対的な事実があるかのように語られているのです。また、そのような歴史認識を育成するような教授が行われています。歴史学において、「階級」は具体的にどう分けられ、特定の階級には誰が当てはまるのかという議論が交わされるように、歴史で扱われる出来事や物事は、多様な解釈が可能となっています。

さらに言えば、私は1つの歴史事象において様々な解釈ができてしまうという歴史の複雑さが歴史の魅力でもあり、面白さだとも思っています。

このように、歴史は単一で決められたものではなく、様々な解釈ができるものであるという歴史認識を、歴史教育によって育む必要があるのではないのでしょうか。



史資料を用いて、多様な歴史解釈に触れる加藤実践

加藤先生の授業理論

加藤先生は、「戦後歴史教育」における第2期に当たる人物です。「歴史認識」を重視する第1期に対して、次のような問題点があると主張しました。

*「戦後歴史教育」

：戦時の皇国史観に基づく歴史教育を批判し、新たな理論と方法、認識を持ち実践していく歴史教育

→時期区分 I. 1945-70年 「歴史認識」を重視

II. 1970-95年 歴史における「主体」を強調

III. 1995年- 歴史の「語り」を重視



- ①一方向の講義により、歴史主体と教育主体が一致していない
- ②史実の存在や重要性が予め決められており、啓蒙的になっている
- ③歴史における論理性、実証性が重視されていない

このような問題点を乗り越えるため、加藤実践では、

**「歴史に対する個別的で科学的な認識能力と
主体的で民主的な歴史意識の育成」**

が目指されています。

実践の構造

「生き生き」とした
活動の導入

加藤実践

根拠に基づいた
主張の形成

様々な解釈に基づいた
「歴史の真実」への接近

単元構成

史料読解・課題提示

仮説の立案

生徒間の討論

支持投票(事後課題の解答)

私がこの理論を用いるなら...

「なぜ日本は十五年戦争へと向かっていったのか」というMQの下、20世紀の世界規模の戦争への動きを学習する授業を実施したいと思います。

まず、教科書や資料集、さらに教材研究で収集した史資料を用いて、日本が戦争へ向かう様々な原因を読み取らせます。

次に、各生徒が最重要と考える原因について、史資料から根拠に基づいた主張を作り上げてもらいます。

最後に、様々な原因に関する代表者の主張をピックアップした討論を行うことで、歴史的解釈をめぐる相互批判の機会を設け、生徒の主体的な歴史認識を形成させていきたいです。



今日における加藤実践の意義

これまでの歴史教育は、社会科・地理歴史科における膨大な学習内容のそぐわない授業時間数や志望校合格を第一目標として掲げる学校の方針から、歴史用語を暗記する授業を行う傾向があるという問題を孕んでいます。この暗記型の歴史授業によって育成されるのは、歴史は単一で普遍的なものであるという誤った歴史認識です。

現在、歴史教育に主体的・対話的で深い学びを取り入れる、つまりアクティブ・ラーニングの視点からの歴史教育改善が目指されています。加藤実践は、教師による一方的な教授ではなく、生徒自身が根拠に基づいた歴史解釈を行い、討論・支持投票によって歴史意識を洗練させていきます。さらに、固定化された定説のみ教えるのではなく、史資料から歴史解釈を作り上げるため、歴史は様々な解釈が可能であるという歴史認識を育むことができます。

従来の授業を主体的・対話的で深い学びに変えていくために、加藤先生の理論大いに役立つと考えています。さらに、歴史における史資料の重要性も生徒たちは学ぶことができるのではないのでしょうか。